

塩谷都市医師会だより

Contents

特集 第5回塩谷都市医師会市民公開講座
医療連携体制推進事業
シリーズ 塩谷医療史第2回

社団法人 塩谷都市医師会
広報委員会

〒329-1312

さくら市桜野1319番地3

さくら市氏家保健センター内

TEL 028(682)3518

FAX 028(682)5760

特集

第5回市民公開講座開催される



11月8日(日) 矢板市文化会館大ホールにおいて第5回市民公開講座が開催され、約400人の市民が出席した。今回は「運動習慣で一病息災」をテーマに生活習慣病の予防のための運動に関する講演会が行われた。矢板市医師団の池田先生が司会を務め、山田矢板市医師団長の開会の辞、尾形塩谷都市医師会長の主催者挨拶に続いて、遠藤矢板市長から来賓の挨拶をいただき講演が始まった。

講演第1部

尾形クリニック所属の健康運動実践指導者の関智史氏による「生活習慣病予防に役立つ運動療法」であった。関氏は実演を交えながら矢板市すこやか体操や貯筋体操を披露し、運動はECOTレーニングが大切で、Eは笑顔で、Cはこつこつと、Oはお気楽にニコニコペースで無理せずやるように写真を多く使って分かりやすく説明した。力が入りすぎると般若の顔のように怖い顔になるので、「にこにこしたお多福のような顔で運

動しましょう」と般若と

お多福の顔を交互にスクリーンに映すと会場は笑いで包まれた。

講演第2部

順天堂大学医学部名誉教授の河盛隆造先生の「運動療法で一病息災」であった。河盛先生はNHK「今日の健康」でもおなじみの糖尿病の大家で、4年前も同じ矢板市文化会館で講演をしていただいた。

今回は特に生活習慣病を防ぐための日常のアドバイスを中心にしたわかりやすい話で、特に男性は体を動かさないため生活習慣病になる人が多いので、夕食の後片付けは男性が率先してやるように、運動不足の人は毎日の生活に少しでも体を動かす習慣をもつべきで、立っているだけでも違うとの話があった。また、食事については毎食、毎日でカロリー計算は大変なので、一週間単位で食べすぎたら、その後の3~4日は食事をセーブしたり、体を動かしていなかったと感じたら体を動かすというふうに、大まかに捉えて体重が増えないように注意したほうが取り組



みやすいとの話でした。

公開講座の参加者は生活習慣病の予防に役立つ有意義な話を

塩谷都市医師会ホームページ/メール

URL <http://www.tochigi-med.or.jp/shioya/>
メール shioya@tochigi-med.or.jp

広報委員会編集部

岡 一雄 r2d2@msh.biglobe.ne.jp
尾形新一郎 ogata@o-ga-ta.or.jp

医師会事務局

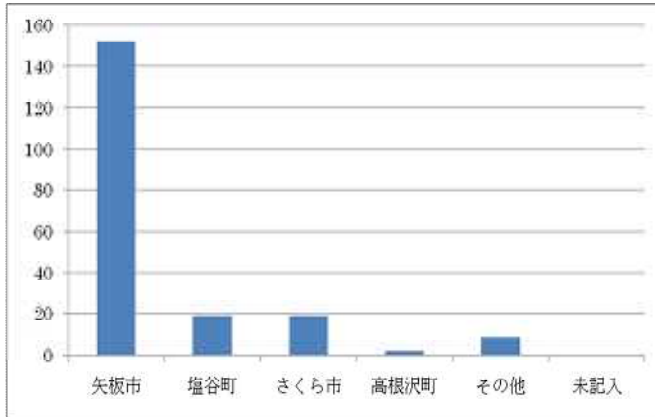
桑川 shioya@triton.ocn.ne.jp
坂和 sakawa@e-shioya.jp

聞くことができた講演であった。

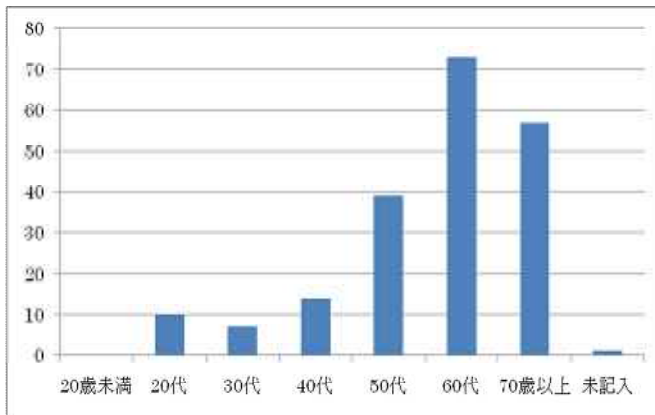
なお、講演参加者のアンケート速報を下記に示す。

公開講座アンケート集計

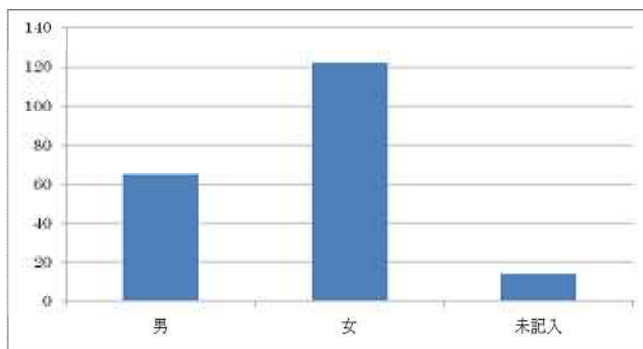
お住まい



年代



性別



講演のわかりやすさ

講演 1 関智史先生			
わかりやすい	むずかしい	未記入	総計
197	2	2	201

講演 2 河盛隆造先生			
わかりやすい	むずかしい	未記入	総計

184	7	10	201
次回講演会への参加・不参加			
参加したい	参加したくない	未記入	総計
197	1	3	201

コメント

関先生の講演が、楽しかった、良かった等のコメントが多数寄せられ、河盛先生のお話もとても分かりやすく勉強になったとのコメントが多数寄せられた。

医療連携体制推進事業始まる

今年度から塩谷郡市医師会では栃木県の委託事業として医療連携体制推進事業を始めることになった。その手始めとなる研修会が10月22日(木)さくら市氏家保健センターにおいて開催され、医師、訪問看護師、ケアマネージャーら80人が参加した。

研修会では大田原赤十字病院脳神経外科部長の井端由紀郎先生による「脳卒中の病診・病病連携」と、ひばりクリニック院長の高橋昭彦先生による「在宅医療と地域連携 - 医師とケアマネージャー・介護職との連携のコツ - 」の二つの講演が行われた。その要旨を以下に記す。

■特別講演 1

演題：「脳卒中の病診・病病連携」

講師：大田原赤十字病院脳神経外科部長

井端 由紀郎先生

脳卒中の病診連携は入院時の前方連携と退院後時の後方連携がある。前方連携を疾患別時間帯別にみると、脳出血やくも膜下出血は発症時の症状が強いため、ほとんど救急車での来院で時間帯の特徴はないが、脳梗塞では昼間は他の医療機関が受け入れ可能であり、当院では夜間や休日の受け入れが多い傾

向にある。地域ごとの人口あたりの入院患者数は、大田原市が最も多く、次いで那須塩原市、那須町、矢板市の順であった。

後方連携について検討すると、退院は（１）直接自宅へ退院（２）回復期リハビリ病院へ転院（３）療養型病院へ転院の３つに分けられる。退院時に歩行可能かどうか（１）と（２）の選択のポイントで、経口摂取可能かどうか（２）と（３）の分かれ目になる。重症例が最も問題で、気管切開や経管栄養などを必要とし、肺炎などの合併症が多発するため平均在院日数が 80 日に達している。しかも後方ベッドとなる療養型病床が満床状態で受け入れてもらえない。さらなる療養病床の削減の動きもあり、三次救急病院で長期入院患者が増えることにより新たな救急の受け入れに支障がでるのではと心配している。

■特別講演 2

演題：「在宅医療と地域連携」

講師：ひばりクリニック院長

高橋 昭彦先生（宇都宮市）

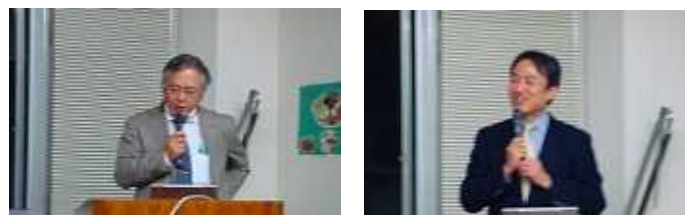
在宅支援診療所は 2006 年に制度化され、訪問診療を行う患者に対して他の医療機関や訪問看護ステーションと連携して 24 時間体制の往診と訪問看護を提供する。全国で 1 万ヵ所、栃木県には 118 ヵ所届け出されているが、実際に 24 時間対応しているのは 1/3 程度といわれている。その一方で一般の診療所でも夜間に対応しているところもある。訪問看護は在宅医にとって重要なパートナーであり、患者家族にとっては身近な存在で身体的ケア、医療的処置、麻薬や薬の管理指導、ゆれる心と向きあう重要な存在である。訪問看護が 24 時間体制になっていない地域では在宅医の負担が大きい。

ケアマネージャーの役割は適切な保健医療

サービス、福祉サービスが総合的に提供されるよう配慮することである。重要なことはサービス提供者と利用者の連携調整、サービス担当者会議を開くことである。しかしケアマネからは、医療機関の敷居が高い、情報してもらえない、面会時に料金を請求されたなど不満の声がある。

ネットワーク型の在宅医療では医師・訪問看護・ケアマネの連携があり、さらに歯科医師、薬剤師、居宅介護サービス事業者などがその人のためのチームを作る必要がある。

キーワードは「カイコホケコ」、カ：介護保健の申請、イ：医療(在宅)の確保、コ：告知状況の把握、ホ：訪問看護の確保、ケ：ケアマネージャーの確保、コ：後方病院の確保、と考えている。そして入院中から在宅にむけて準備し、早めの退院調整を行うことも重要である。医師と訪問看護ステーション、ケアマネージャー、介護職がお互いの仕事を理解し、退院調整・地域連携の課題についてお互いが連携することで利用者や家族がよりよい在宅生活を送れるようになるだろう。



左：井端先生 右：高橋先生

事務局からのお知らせ

新年会のご案内

平成 22 年 1 月 22 日（金）19 時
さくら市医師団の当番でよし茶屋
（氏家）にて開催されます。

「CKDの予防」研修会

平成 22 年 2 月 9 日（火）18 時 30 分
講師：大久保泰宏先生（済生会宇都宮病院）
をお招きします。

シリーズ 塩谷医療史 2-

五十嵐良禎(氏家)

塩谷地区の中核病院である黒須病院の設立は明治40(1907)年、当時県立宇都宮病院に勤務していた黒須菊三九が氏家の有志らにより設立された氏家共立病院の院長として招かれたことが発端である。黒須菊三九は後に共立病院を購入し、黒須医院を開業する。

一般にはあまり知られていないが、氏家共立病院の前身は五十嵐良禎が院長を務めた五十嵐病院である。五十嵐が明治40年8月に死去したため、その病院の存続を願った地元有志がその土地や建物を使用して株式会社の形式をとった病院を設立したのである。はたして五十嵐良禎とはどんな人物でどんな医療を行っていたのであろうか。

五十嵐良禎は『宇都宮医師会史』によると福島県東郡泉田村出身で、会津の西洋医関良一の門下となり、福島県立須賀川医学校を卒業後に順天堂病院で勉強し、明治12(1879)年矢板で開業し、その後17(1884)年に氏家に移ったことになっている。また、同史には明治25(1892)年医術研究のため県立宇都宮病院の医員となったとも記載されている。

五十嵐病院について記載されている資料が数点新たに発見された。まず、渡辺清(氏家町狭間田)の『百姓絵日記』に明治39(1906)年8月13日「友人の末吉君、境君と一緒に末吉君のお母さんの薬を取りに五十嵐病院に行った」と書かれている。また『栃木県営業便覧(明治40年)』によると五十嵐病院は婦人科・内科・産科を標榜している。下野新聞には明治32年3月、栃木県庁内で娼妓治療医協議会が開催され、塩谷地区からは五十嵐が代表で出席したことが書かれている。氏家の西導寺には五十嵐家の墓が残されており、墓碑や過去帳から安政6年生まれで、明治40(1907)年8月31日に死亡したことが確認できる。享年48歳だった。さらに明治40年12月21日下野新聞には「五十嵐病院は地方有志200余の賛助を得て明治32年に設

立されたが院長死去のため、協議の上、組織を株式会社として氏家共立病院と改称し、院長に県立病院医学得業士黒須菊三九を招聘して開院することになった」と書かれている。これらの資料から五十嵐病院は婦人科疾患を得意とした病院であったことや多くの有志の賛助で成立したことからやや公的な意味合いの医療機関であったことが伺える。

現在、五十嵐家の墓を守る者は誰もなく、その子孫がどうしているのかは確認できない。私たちの調査もここまでかと諦めていた時、那珂川町(旧馬頭町)にお住まいの鈴木敏彦さんから、突然医師会に「こんなものが襖の下張りから発見されました」と連絡があった。今年の6月末のことである。鈴木さんは趣味で古文書を集めたり、解読している方で、古いお屋敷から出た襖の下張りを一枚一枚はがすことをされている。当時の和紙は貴重で、襖の修理に用いたため、古文書が襖の下張りから出てくることは決して珍しいことではない。出てきたものは明治15年11月付、五十嵐良禎の署名のある「診察書」(写真参照)である。これは今でいう診断書であるが、これは間違いなく矢板村で医療を営んでいた五十嵐良禎の足跡である。もし、鈴木さんが襖を剥がさなかったら、あるいは我々が五十嵐良禎のことを調査していなかったら決して日の目を見ることがなかった古文書で、偶然とはいえ不思議な縁を感じる。

(担当:岡 一雄)

